

より、胃気の下降作用が障害され乾嘔を起こし、また、心下水邪のため津液が上昇せず、口に達しないため口渴が起こる。傷寒論の条文は、これらのことが、省略して記されていると考えられる。

大塚敬節、矢数道明、清水藤太郎の『漢方診療医典』、大塚敬節『症候による漢方治療の実際』に、小青竜湯は口腔内疾患に有効と言う記述はない。口腔内で使用される漢方は、黄連解毒湯、桃核承気湯など実証で使用される薬方が多く記述され、虚証の時代の現代に使用される薬方の記述は少ない。現代においては、容易に清涼飲料水が手に入る状態で、なおかつ日本は湿性の国であり水分が蒸発しづらい。また、近年ストレス社会に加え、冷暖房の発達により、乾燥と湿気が複雑に入りまじる環境下にあり体の消耗がはげしいと考えられる。以上のことから、心下に水気がたまりやすく、なおかつ外邪が入りやすい状態にあると考える。

今回、小青竜湯を取り上げ、歯科における考察を試みた。

29) 九州歯科医学専門学校における航空部について (2)

Student Aviation in Kyusyu Dental College during the 2nd World War (1941~1945) (2)

北九州市 ○上瀧口 武
九州歯科大学 小林 繁
嶋村 昭辰

Takeshi Kamigatakuchi, Kitakyusyu City
Shigeru Kobayashi and Akitatsu Shimamura,
Kyusyu Dental College

前報で報告した九州歯科医学専門学校報国団航空部の資料は今日失われ、その訓練母体であった大日本飛行協会、福岡(九州)飛行訓練所の記録も敗戦時焼却処分されて殆ど存在しない。

戦後40年記念として昭和60年、当時の構成員だった元教官、学生諸氏の資料提供や証言と、新聞記事、民間航空史話(昭50年)、学生航空の50年(昭和55年)などを参照して記念誌「元岡にて」を刊行した。以下それにより報告する。

大日本飛行協会

昭和15年9月20日閣議により民間航空の統合

案が決定した。それまでの帝国飛行協会を母体として大日本飛行協会(以下飛行協会とする)が10月10日発足した。傘下に日本学生航空連盟(朝日系)、日本帆走飛行連盟(毎日系)、青年航空団(朝日系)、各飛行学校など一切の民間航空諸団体を収めた。

事業は大学高専学生の航空、滑空訓練、航空思想の普及などで、全国の飛行訓練所は東京(羽田、調布)、大阪(阪神、盾津)、名古屋(小幡ヶ原)、福岡(元岡)、仙台、札幌(丘球)、水上機訓練所として滋賀県(天虎)、横浜の十ヶ所であった。

福岡飛行訓練所は小規模であるが、全国唯一の新設されたもので新鋭の気風に満ちていた。所長は高橋清作陸軍大佐、主任教官柴田熊雄、派遣将校桜井晴一陸軍少佐、他教官職員などであった。

ここの学生構成には九大医学部の陸軍衛生部依託学生、九大航空学科の海軍技術依託学生らがあり、それぞれ一般学生と等しく操縦訓練を受けていた。また滑空訓練学生の中には無線操縦の特許を持つものもいた。訓練後ガソリンエンジン模型機を飛ばすものもいて、ここでの気風は一般に考えられるより自由で重層的な構造を持ち、制裁行為もなかった。

操縦訓練の経過

訓練は土曜日の午後、日曜の休み、夏期、冬期の休暇祭日など学業の余暇に行ない、在学中の二年間に練習機、初練、中練による基本訓練を実施するものであった。しかし開戦とともに学生の学制は在学年限短縮、徴兵猶予の停止と戦局の急迫とともに変転慌ただしく、学生航空は入隊前の短期訓練と変り、それも切迫した航空燃料不足により、中止の止むなきに至った。

昭和16年6月30日福岡市における学生航空連盟結成式に先立ち、福岡県下大学高等専門学校の学生代表の氏名と参加学生数が朝日新聞に掲載された。九州歯科医専(以下九歯)は得長一文(仮名)など18名があった。記念誌作成に当り取材を申し込んだところ、当時教練の配属将校の強要によるもので、他は記憶にないとの話であった。

16年6月元岡飛行場の完成を待ち、7月10日の夏期休暇から1期生の合宿訓練が開始された。学生数は整備、滑空訓練を含めるので正確には不明だが、操縦訓練は九大5名、明治専門1名、九歯1名、西南学院(西南)4名、福岡高等学校2名な

どの学生の記録があり、他に雁巣の海軍予備航空団から受け入れた西南、福岡高商を含め合計 22 名であった。九齒の 1 名は左門正之であるが、卒業名簿に記載がなく 17 年 3 月退学となっている。

12 月 8 日太平洋戦争開戦。この前日元岡飛行場で飛行協会本部の訓練査閲があった。

17 年 5 月、2 期生入所者 27 名、この中には九齒生はいない。4 月に B 25 の東京空襲、6 月ミッドウェー海戦、8 月からガダルカナルを含めて陸海空の熾烈な攻防戦が繰り返された。

10 月全国各地の訓練所から選出された学生訪満飛行が行なわれた。元岡より柴田教官外 1 名参加。

18 年 6 月、3 期生入所者 36 名、この年初めて大刀洗陸軍飛行学校で身体検査が行なわれ、卒業後に陸軍に入隊する旨の誓約書を提出した。九齒から 12 名受験して 1 名、上瀧口武（県 3）が合格、航空部長は平川正輝助教授だった。訓練の費用、食費は不要だが用具や交通費は自費で、部の補助はなかったが落ち着いた環境での訓練が行なわれた。

2 月ガダルカナル島撤退、4 月山本五十六連合艦隊司令官戦死、アッツ島玉砕など、大量消耗戦となり、戦局は次第に非勢となる。

7 月、学生飛行全国一周、県下母校訪問飛行。

8 月、卒業前、陸海の募集により元岡 1 期生それぞれ入隊（特操 1 期、13 期海軍予備学生）

この時卒業に当り九齒より志願、陸軍特別操縦見習士官（特操）第 1 期に上橋大作（専 19）、第 13 期海軍飛行予備学生に川村正治、久保木春雄、沢田正人（戦死）、外山勤吾（戦傷）、浜崎初二、日隈一男、吉野末男、米良忠文（何れも専 20）の 9 名が入隊した。

19 年 3 月、4 期生、この夏卒業予定者に対し、飛行協会は学生飛行訓練生を募集し、九齒から次の 3 名が合格した。西山敬三、松尾真一、渡辺富美雄（何れも県 1）、彼等は 19 年 6 月、第 3 期特操として仙台飛行学校に入校した、のち大陸興城にて終戦。この時福岡訓練所の 2、3、4 期生（文科系と志願）および全国訓練所の学生の多数が仙台に入校し、また燃料欠乏のため、その後の協会の訓練は中止の止むなきに至った。

19 年 11 月～20 年 1 月、5 期生 30 名、福岡訓練所は海軍の管轄下となり、博多空から派遣将校（13

期海軍予備学生）が着任して訓練が開始され、次の九齒生が志願参加した。有吉正一、伊那義郎、朱雀直道（県 2）、上瀧口武（県 3）。単独飛行、基本訓練を終了し、続いて次期 30 名が 2 月から、安積 宗、山隈龍祥（県 2）が参加したが空襲相次ぎ、飛行作業は始まったが間もなく中止となり、何れも博多空への入隊は待機となった。

19 年 6 月、8 月の B 29 北九州空襲以来、11 月から 20 年にかけて東京関東地区、名古屋、関西地区は空襲相次ぎ無差別焼夷爆撃により焦土と化した。

20 年 3 月、海軍練習航空総隊解隊、あるいは廃止され、同月硫黄島玉砕、4 月、沖縄上陸に続き航空戦力を消耗し、8 月原爆投下され敗戦に至った。

昭和 16 年、九州歯科医専報国団に航空機研究部として発足当時には、操縦訓練は当時の学生に馴染まないところがあったのではないかと感じられる。しかし乍、緩急の秋にあたると決然と大空に羽搏いたのであった。

30) 九州歯科医学専門学校における航空部について (3)

高空飛行の歯科的文献について

Students Aviation in Kyusyu Dental College during the 2nd World War (1941~1945) (3)

Studies on Dentistry of High Altitude Flying

北九州市 ○上瀧口 武
福岡歯科大学 上西 秀則
九州歯科大学 小林 繁

Takeshi Kamigatakuchi, Kitakyusyu City
Hidenori Kaminishi, Fukuoka Dental College
Shigeru Kobayashi, Kyusyu Dental College

演者の上瀧口は昭和 18 年（1943 年）九州歯科医学専門学校に入学してまもなく、学生航空の一員として大日本飛行協会に入所し、操縦訓練を受けた。訓練は他校の学生との区別はなかった。その中で歯科学生（生徒）として経験したことを述べてみたい。とは言っても未だ臨床専門課目はなく教養、基礎医学の他は教練に明け暮れていた。

その頃、航空関係の書物を何冊か持っていたが、その殆どは啓蒙書か発動機、気象学などの入門書